

小中英語研究部会 中学校第3学年 指導案

授業日：令和3年11月8日

公開校：高山市立松倉中学校

授業者：中西 俊次

1 単元名

NEW HORIZON 3

Unit 4 『Be Prepared and Work Together』

2 単元について

(1) 題材について

本単元は、防災について扱った単元である。日本で育った生徒には防災に備える意識はあるが、日本を訪れた外国人には災害の状況を想像することは難しく、日本で生活し始めた外国人は防災に関する知識も希薄だと考えられる。教科書は、メグと朝美の会話、外国人の体験談から、日本在住の外国人の実態がわかる題材である。よって、ユニバーサルデザインの観点で日本在住の外国人の防災意識を高めるために、どんなことができるか考えさせたい。

(2) 単元で育む資質・能力について

本単元では、生徒にとって身近な ALT が災害に対してどんな意識をもっているか、災害に対してどんな不安をもっているか理解することを通して、地震後の具体的な状況や地震が起きた際に役立つ防災グッズを ALT に伝えることをねらいとしている。そのために、地震発生後の具体的な状況を想像させること、ALT の不安を把握させることから、ALT が高山で安心して生活するためには、どんな防災グッズが必要なのか、その有用性と使用場面を具体的に伝えられる力を養いたい。

3 生徒の実態

本校は標準コース（24人）と基礎コース（10人）に分けて授業を行なっている。昨年度コロナウイルスの影響で会話活動を十分に行えなかったこともあり、英語で自分の考えを表出することに消極的な生徒が多い。今年度、Small Talk や単元末の言語活動を継続して行ってきた結果、自分の考えについて即興で話そうとする意欲は高まってきた。しかし、コミュニケーションの目的や場面、状況に応じた内容や表現を選び、即興で伝えることに弱さが見られる。そこで、目的や場面、状況に合わせて伝える内容を選択、精選したり、自分の考えを英語で粘り強く伝えたりする力を高めたい。

4 研究主題に関わって

〈研究主題〉

「できた・わかった」を実感しながら、コミュニケーションに挑み続ける児童・生徒を育てる指導を求めて
～活動を通して習得し（思考しながら表現し）、仲間と共に高まる子どもの育成～

〈キーワード〉 Learn by doing

(1) 主体性を生み出す準備と指導（つけたい力の明確化）

単元導入時に、身近な人の実態を取り上げ提示することで、課題をより身近なものに感じ、課題解決に向け意

欲的に学習に取り組めると考えている。また、ICT を活用し題材や課題に合った視覚的情報を与えることで、学習に対する主体性を高めることができると考えている。これらの方法で、生徒が単元末の言語活動における自分の発話内容のある程度イメージできる1時間を単元導入時に仕組みたい。

そのために、本単元では高山市在住のALT の災害に対する実態をアンケート結果として提示し、過去の災害の状況や避難所の様子、今後予想されている地震について具体的な資料を用いたオリエンテーションを行う。

(2) 思考しながら表現するための指導過程（学び合いのある協働活動、発信する力をつける単元指導計画）

本単元では、単元末に向けて内容の深まりを生み出すために、災害や防災グッズに対する知識を高めていく必要があると捉えている。そのため、各単位時間にペアでの活動を位置付け、他者の意見に触れる時間を意図的に設定した。例えば、第6時では地震発生時にALT が困ることについて意見交流を行う。第8時には、ALT に災害に備えてどんなことができるか伝え合う活動を仕組む。各単位時間のペア活動で、知識を蓄えたり、単元末の活動に向けて思考するための視点を増やしたりしたい。

本校では、単位時間ごとに単元の題材に合った Small Talk を仕組んでいる。また単元末の活動に向けて、表現力を高められるような内容を設定している。そこで本単元の Small Talk では、地震に対する準備や被災後のトラブル、防災グッズの例を挙げ、それらが被災時にどう役立つかといった内容を取り扱う。本単元の Small Talk では、単元末の活動に合った内容の対話を毎時間繰り返すこと、生徒の発話内容を毎時間フィードバックすることを通して、思考しながら表現する力を養うことと自分の力で表現したという自信をもたせられるように指導したい。

(3) 次の学びに向かう力の育成（内容、表現、技能の見届け）

各単位時間に Performance Time を位置付けている。Performance Time では、その時間の言語活動で発話したことや仲間と交流したことをもとに、課題に対する自分の意見を書きまとめる時間を設けている。生徒が思考し書きまとめた内容や表現をフィードバックすることで、表現のエラーを正したり、内容を深めたりするきっかけを生み出し、次時に向かって学びが継続するようにしたい。